

第 53 回

社会貢献者の記録



公益財団法人
社会貢献
支援財団

第 53 回

社会貢献者の記録

目次

表彰選考委員プロフィール	004
式典次第	005
会長挨拶	006
表彰選考委員挨拶	008
受賞者代表挨拶	010
記念写真	012
表彰式スナップ写真	013
乾杯の御発声	020
祝賀会スナップ写真	021
社会貢献者表彰とは	025
受賞者手記 目次	026
資料編	110

表彰選考委員プロフィール

委員長



脚本家 東北大学相撲部総監督

内館 牧子

東京都教育委員会 教育委員ほか

脚本：「ひらり」「てやんでえッ!」「私の青空」「毛利元就」「エイジハラメント」ほか多数

著書：「終わった人」ほか多数

委員



元国税庁長官

大武 健一郎

関西大学客員教授 認定 NPO 法人ベトナム簿記普及推進協議会理事長

著書：「平成の税・財政の歩みと21世紀の国家戦略」「税財政の本道— 国のかたちをみすえて」ほか多数

委員



産経新聞 大阪本社 編集局 編集長

小川 記代子

委員



久米繊維工業株式会社 取締役相談役

久米 信行

著書：「メール道」「ブログ道」(NTT 出版)「NPO のための IT 活用講座 効果が上がる情報発信術」「すぐやる人だけがチャンスを手に入れる」ほか

委員



ノンフィクション作家 公益財団法人民間放送教育協会会長

吉永 みち子

「羽鳥慎一 モーニングショー」コメンテーター

「あさちゃん! サタデー」コメンテーター

著書：「気がつけば騎手の女房」「性同一性障害」「26の生きざま」「老いの世も目線を変えれば面白い」「試練は女のダイヤモンド」ほか多数

式典次第

第一部 表彰式

10：30…開 式

- ・ 会長挨拶
- ・ 表彰選考委員挨拶
- ・ 表彰状並びに副賞の贈呈
- ・ 受賞者代表挨拶

12：20…閉 会

第二部 祝賀会

12：30…開 宴

- ・ 乾杯のご発声

13：30…閉 宴

(2019年11月25日 於帝国ホテル東京)

会長挨拶

社会貢献支援財団の会長を務めさせていただいております、安倍昭恵でございます。

今年、関東と東北地方を中心に猛威を振りました台風15号と19号、その後の大雨などによる犠牲者の皆様に対して、追悼申し上げますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、本日は500名近い皆様にご臨席いただき、第53回社会貢献者表彰式典を挙行させていただきますことを大変嬉しく、心より感謝申し上げます。表彰式の開催にあたりましては、ご支援いただいております日本財団はじめ、候補者を推薦下さいました皆様、またご列席賜りました皆さまにお礼申し上げます。

本日は、表彰選考委員会より選考いただきました人命救助3件、社会貢献37件、計40件の功績の表彰をさせていただきます。受賞者の皆様、そして活動を支えておられるご家族はじめ関係者の皆様、誠におめでとうございます。皆様には心から敬意を表するものでございます。私もこの8月から11月にかけて、広島・徳島・宮城・秋田・大阪の8団体の活動現場への訪問や、都内及び愛知で行われた設立記念式典に伺い、これまでの受賞者の皆様に再びお目にかかる機会を得、受賞後も引き続き活動されているお姿や、受益者の方々に喜ばれている様子を目の当たりにいたしました。

この場をお借りいたしまして、私が日頃関心を持っている海洋環境の活動について少しだけお話をさせていただきたいと思っております。

約30年くらい前にサンゴ礁保護協会という団体に入れていただいて以来、私は海洋環境に大変関心を持つようになりました。最近では台風の被害、海水温の上昇によって引き起こされている自然災害も多くあり、またプラスチックごみ問題、違法漁業問題など多くの方に海洋環境問題に関心を寄せていただいているところでございます。ほんとうに私たちが最重要課題として取り組まなくてはいけない大切な問題だと思っております。私は活動を続けています。そのきっかけになったのが東日本大震災でございました。巨大な防潮堤を作るか作らないかというような議論があるなかで、海洋環境問題に特に関心を寄せるようになり、その問題に取り組みながら、現地の気仙沼であったり、仙台であったり、あるいはハワイやニューヨークに行ってもシンポジウムを開催して参りました。昨年は「太平洋・島サミット」がいわき市でございましたけれども、その



際にも配偶者プログラムの中で海洋環境について取り上げさせていただきました。多くの首脳夫人の皆様が、やはり島国ですので海洋環境には大変関心が深く、有意義な議論をすることができました。そして今年開催された大阪でのG20のサミットにおきましても、私は配偶者のプログラムとして海洋環境を取り上げさせていただきました。大阪の子どもたち、高校生や大学生も含めて、配偶者の方たちと色々な議論を交わさせていただくことができました。それを受けて大変嬉しいことに、今年ビアリッツというフランスで開催されたG7におきまして、マクロン大統領の奥様が海洋環境を配偶者プログラムとして取り上げてくださいました。そして先日タイで行われたアセアンの会議においてもタイの首相夫人が海洋環境を配偶者プログラムとして、日本が一生懸命やっていることを受けついでこのプログラムを入れました、と仰っておられました。

私は、人間は生まれてくるときにそれぞれのミッションを持っているのだろうな、と思います。今日受賞される方々は本当に大きな使命を持って、素晴らしいご活動をされていらっしゃると思います。私も毎回この受賞式に参加させていただくたびに、本当になんて素晴らしい方々がこの日本にはたくさんいらっしゃるのだろうと感動いたします。「そんなにすごい事、私にはできないわ」と私も思いますし、多くの方が思われると思います。でもそれぞれミッションは違うものがあると私は思っています。その人その人が自分に与えられた使命をしっかりと引き受けていくということがとても大事でそれは、朝、おはようございますと大きな声で挨拶をすることかもしれないし、また道に落ちていたゴミを拾うことかもしれないですし、ひとりひとりができることを行動に移していく、それがこれから良い社会を創っていくのではないかと、それぞれの役割がきちんと社会で活かされていく、そんな社会になったらいいなというように思っています。

今日受賞される皆様も本当に素晴らしい活動をされていらっしゃる皆様でございます。これからも皆様方には素晴らしい活動を続けていただき、この国が本当の意味で住みやすい豊かな国になりますようにお力をお貸しくくださいますようお願いを申し上げます。

最後に本日ご臨席の皆様のご健勝と一層のご活躍を祈念申し上げまして簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

受賞者の皆様、本日は本当におめでとうございました。

公益財団法人 社会貢献支援財団
会長 安倍昭恵

表彰選考委員挨拶

ただいまご紹介に預かりました大武健一郎でございます。

本日は内館委員長が、お怪我からのご回復中というところから、代わりまして第53回社会貢献者表彰の選考過程を含めまして、一言ご挨拶申し上げます。

予め事務局より5名の委員に送付されてまいりました121件の功績のご推薦いただきました各候補者の功績書をまとめました分厚いファイルをもとに各委員夫々が事前に選考いたしまして、その結果を事務局に送り、一表にまとめていただき、それを前提に今年の1月に開催された選考委員会で受賞者の選考に当たらせていただきました。

今回お寄せいただきました候補者の功績の概要の人命救助につきましては、身の危険もかえりみず、まさに咄嗟の行動をとられた勇氣と決断に感服いたしました。

社会貢献につきましては、ネパール、フィリピン、ミャンマー、ケニア、カンボジアなど海外での活動が多く、次いで障がい者や難病患者の支援など社会福祉系の活動そして子どもや若者などの居場所づくりや自立、就労などの支援活動が多く寄せられましたが、いずれも献身的な活動を続けておられる姿に感動いたしました。

いずれにいたしましてもお寄せいただきましたどの活動も自分の利益を考えず世のため、人のために頑張っている内容で、そこに甲乙や優劣はつけようがないのでございまして、選考委員一同、一番悩ましいところでございますが、そのような中から人命救助3件、社会貢献37件の活動を選考させていただきました。

先程、海外での活動の推薦が多かったと申しましたが、私もベトナムなどでボランティア活動を15年続けており、各国を回っておりますが、それらの国々では皆様のようにな献身的な活動しておられる日本人の方々をたくさん拝見しています。欧米系ボランティア活動はキリスト教など宗教に基づく活動が中心で組織も大きい団体が多いかと思いますが、皆様のようにつくりの組織でまさに善意に支えられて活動しておられる方々は決して多くないと思います。新聞では皆様のよう素晴らしい活動はほとんど報じられず、暗い話で溢れていますが、日本人は本当にやさしく素晴らしい方々がたくさん居られると思っています。どうかこれからもぜひ活動を続けていただき



いと思います。

さて、曾野綾子元選考委員長の言葉としまして、内館牧子委員長もお話になっていらっしゃる「副賞のお金はどうぞ皆様ご自身やご自身のグループのためにお使いください」ということですが、実は私もそのように思います。と申しますのは、この前事務局にお邪魔させていただきました折に、前回受賞されましたカンボジアの女性のために途上国で縫製の指導などを行っている団体から、副賞を長年ボランティアで頑張ってきた仲間の慰労に当てさせていただきましたというお便りと30人程が笑顔で集っておられる写真を拝見させていただき、この一時のリフレッシュがまた次の活動につながると思えたからでございます。

本日は皆様本当におめでとうございました。これからの一層のご活躍をご祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

公益財団法人 社会貢献支援財団

選考委員 大武 健一郎

受賞者代表挨拶

皆さん、こんにちは。

只今の阿部亮さんのビデオを見まして、日本というのは素晴らしい方がいることを痛感しました。Beautiful Country Japan だと。素晴らしい美しい日本であると、昨日から今日にかけて皆様のお話を伺いながら痛感しております。日本というのは多彩で良い人が集まっておりますね。Beautifulな国だと僕は思います。



今日、私は秋田県から来ております。この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の「社会貢献者賞」という栄誉ある賞を受賞することになりました。受賞者の代表として挨拶をする機会を頂きましたことは身に余る光栄であります。受賞にあたり、会長の安倍昭恵様、表彰選考委員長の内館牧子様を始め関係者の皆さまに心から御礼を申し上げます。特に、内館様は秋田県に深いご縁がありまして、いつも地元新聞紙上で県民へ力強い応援メッセージを贈っていただいておりますことを、本日はご出席ではありませんが、この場をお借りして感謝をお伝えしたいと存じます。

NPO 法人蜘蛛の糸は、「自殺率全国一の秋田県でワーストワンの返上」を目指して2002年6月から活動を開始し、18年目を迎えました。これまでマンツーマンの相談件数は6,000件を超えました。「常設」「面談」「無料」をキーワードに「問題解決型」の相談を続けております。相談員は26人おりまして、弁護士、司法書士、臨床心理士、人の命を救うために必要な人たちがネットワークを張っているような体制です。自殺を考える中小企業経営者、ひきこもりの若者、失業して生きる価値を見失った壮年者、健康問題を抱える高齢者など等、多様で多彩な相談者の悩みに向き合ってきました。東日本大震災発生直後の4月には、岩手県釜石市に入り被災者支援の相談活動も開始しました。私の問題に向き合う姿勢はすべて現場にあります。現場に立ち、現場の風やにおいや光を感じ、現場の悲しみに向き合うのが私の姿勢です。そして「個」の相談経験を「点」につなげ、歳月をかけて「点」を「線」に結び付け、「線」が結び付き終わったら「面」にかえて「ネットワーク」をつくり上げていきます。長い長い闘いです。

これまでも秋田県の民間団体の創設、自殺予防県民運動を立ち上げてきました。日本の自殺者数は自殺対策基本法の制定以降に「3万人台」から「2万人台」に減少し、秋田県も2003年の「519人」をピークに、昨年は「199人」と60%以上の減少となりました。自殺率も全国4位に改善されております。これまで、ありとあらゆる人の悩みを受けとめ、そして寄り添ってきましたが、人間にとって最も大切なことは「希望」です。希望のある人間は簡単には死を選びません。「人間は強いものだ」「素晴らしいものだ」ということが相談現場での帰結であります。これからも、いち相談員として「人間のもつ素晴らしさ」を見続けて社会貢献を続けることをこの場でお誓い申し上げます。

この度の副賞は、いま日本で問題になっております「若者の自殺対策」に対応するべく、「ひきこもり」「登校拒否児童」「ニート」の実態把握とシンポジュームの開催等、ひきこもり専用の相談機関の立ち上げに使わせていただきたいと思っております。

本日の受賞にあたり、受賞者を代表して深甚の感謝を申し上げ、御礼の言葉といたします。ありがとうございました。

特定非営利活動法人 蜘蛛の糸
理事長 佐藤 久男

記念写真



更生保護法人
 鳥取県更生保護給産会
 霜村 哲男
 社会福祉法人ステップさが
 深川 英之
 社会福祉法人
 神戸いのちの電話
 水野 雄二
 NPO 法人
 西尾川子センター
 西川 奈央人
 佐藤 修
 認定NPO 法人
 多言語社会リンクさがわ
 松野 勝氏
 NPO 法人 蜘蛛の糸
 佐藤 久男
 杉山 真智子
 認定NPO 法人
 四つ葉のクローバー
 札幌後見支援の会
 半藤 政一
 NPO 法人
 日本ホスタルクラブ協会
 大棟 耕介
 NPO 法人 トルワンス
 小山 訓久
 THUYA SOE
 最上 都寿美
 戸塚 仁

一般社団法人
 パーソナルサポートセンター
 新里 宏二
 NPO 法人
 サボイ トースティンション 編
 更生保護法人 華田由泉
 相川 洋子
 深野木 信
 北浦 茂
 NPO 法人 ホサアハウス
 森 康彦
 社会福祉法人 佐賀いのちの電話
 吉野 徳親
 南雲 和子
 板倉 未来
 社会福祉法人
 ももやま福祉会 くもんハウス
 谷村 敏幸
 ユニバーサル絵本ライブラリー
 UniLeaf
 大下 利栄子
 京都ファミリーハウス
 古賀 會安子
 田口 智恵
 有光 武元
 秋山 悦子
 一般社団法人 学術の森
 中村 信二
 岡山放送株式会社
 篠田 吉央

川岡 俊子
 遠藤 芳輝
 佐藤 定子郎
 八木 俊貴
 静岡県サトルコ友の会
 神谷 京子
 安倍 昭恵 会長
 中西 幸子
 石川 誠
 宮崎 慶文
 松下 照美
 阿部 亮

表彰式















乾杯の御発声

皆様こんにちは。日本財団の尾形でございます。

本来ですと、私どもの会長の笹川陽平がここで皆様へのご挨拶と乾杯の発声をする予定でしたが、本人は今、車のなかでございます。今朝早くミャンマーから帰国したのですが、飛行機が成田に着かず、セントレア空港（中部国際空港）に連れて行かれ、セントレアから成田に戻ってこちらへ帰ってくる途中でございます。



先ほど電話で皆様に「本当におめでとうございます」というメッセージがございました。

本日、式典を拝聴させていただきました。40組の方々、本当におめでとうございます。

私ども日本財団は色々な仕事をお手伝いしているつもりでございましたが、世の中にはまだまだ素晴らしい仕事をしている人がたくさんいるのだなと、改めて思い知りました。本当に皆様方の努力というのは日本を良くします。

先ほど蜘蛛の糸の佐藤さんが仰っておられましたが、日本というのは本当に素晴らしい国だなと思います。仕事柄、色々なところへ行かせてもらいますが、やはり日本という国は良い国です。ただ、日本が良いからと言ってその良い国を日本人だけで享受してはいけません。

やはり世界中にはもっともっとひどい状況に置かれた人たちが、もっともっと援助を求めている人たちがたくさんおります。そういった方々にも我々は手を差し伸べるべきだと思います。

本当にこの度の受賞に心からお祝い申し上げます。長々と話しますとお腹が減りますので、そろそろ皆で楽しく語らって親交を深めたいと思います。そして今日のご臨席の皆様方のご健勝とご多幸をお祈りしたいと思います。これから乾杯の発声しますので、どうぞご唱和ください。

それでは皆様の健康とご多幸、そしてここにご臨席の皆様、ご家族の皆様方の幸せを願ひまして乾杯したいと思います。

乾杯！

公益財団法人 日本財団
理事長 尾形 武 寿

祝賀会









社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

第53回社会貢献者表彰の概要

【募集告知】

2018年9月より、ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて。

【対象となる功績】

- 社会貢献の功績

【候補者について】

- 候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない。
- 日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする。
- 候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする。
- 候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる。
- 人命救助に関する功績については、原則として、2018年1月1日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む。

【選考について】

選考委員会開催日：2019年1月28日

【受賞者】

受賞者：40件（うち人命救助3件）

【表彰式】

開催日：2019年11月25日 帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する。

受賞者手記目次

第53回社会貢献者表彰受賞者 40件（敬称略）

最上 都寿美	030
田口 智恵	032
佐藤 定子郎	034
京都ファミリーハウス	036
ユニバーサル絵本ライブラリーUniLeaf	038
札幌後見支援の会	040
認定 NPO 法人四つ葉のクローバー	042
特定非営利活動法人蜘蛛の糸	044
遠藤 芳輝	046
川岡 俊子	048
岡山放送株式会社	050
NPO 法人西淀川子どもセンター	052
更生保護法人鳥取県更生保護給産会	054
社会福祉法人ステップさが	056
社会福祉法人神戸いのちの電話	058
宮崎 慶文	060
南雲 和子	062
一般社団法人学術の森	064
秋山 悦子	066
有光 武元	068
THU YA SOE	070
特定非営利活動法人リトルワンズ	072
特定非営利活動法人日本ホスピタル・クラウン協会	074
戸塚 仁	076

一般社団法人パーソナルサポートセンター	078
特定非営利活動法人サポートステーション輪	080
静岡県サルコ友の会	082
更生保護法人草牟田寮	084
北浦 茂	086
八木 俊實	088
NPO 法人ホザナ・ハウス	090
社会福祉法人佐賀いのちの電話	092
認定 NPO 法人多言語社会リソースかながわ (MIC かながわ)	094
板倉 未来	096
社会福祉法人ももやま福祉会ぐんぐんハウス	098
中西 幸子	100
石川 誠	102
佐藤 修	104
松下 照美	106
阿部 亮	108

対象となる功績内容

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- ▶海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績

最上 都寿美



茨城県

2018年1月19日午後1時頃、最上さんは都内から自宅へ戻るためJR常磐線下り列車に乗車していた。隣に座っていた妊婦の様子が苦しそうだったので声をかけると、「陣痛がはじまった」「臨月だ」とのこと。最上さんは驚いたが、妊婦はまだ話をする余裕があったので、様子を見守っていた。

柏駅に着くころ、更に苦しそうになった妊婦は「破水した」と言って床にくずれてしまった。最上さんは偶然持ち合わせていたバスタオルを取り出し、妊婦の下に敷いた。近くにいた女性に別のバスタオルを渡して周りから見えないよう妊婦を囲ってもらった。列車が駅に到着したときに、最上さんはホームに出て駅員に「発車しないで！」と大声で伝えた。何かとやってきた駅員に事情を説明し、タオルや毛布を持ってきてもらうように依頼した。

車内に戻ると「もう無理です！」と言いながら妊婦がズボンを脱ぎ出したので、「なんとかするしかない！」と最上さんは意を決した。「もう産まれる」という声とともに赤ちゃんの頭が見え、瞬く間に生まれた。駅員から借りた毛布に赤ちゃんを包み、救急隊の到着まで介抱し、母子のピンチを救った。

(推薦者：取手市長 藤井 信吾)

今回はこの夢のような式典に参加させていただき心から感謝しております。

受賞が決定した時も全く想像がつかない式典に、ただ賞状を受け取って…くらいにしか考えていませんでした。この式典は私にとっても家族にとっても一生忘れられない出来事になりました。

そしてこの式典につながったあの出来事。忘れもしない1月19日。息子の外泊許可が出て、久々に我が家に向かっておりました。駅で電車を待っている間も息子は久々のお外に喜びチョロチョロ動き出し、たまたま乗り込んだ6号車。横に座っていた女性の異変に気付いたのは北千住前後だったと思います。すぐには妊婦さんと気付かず、何かの持病の発作だと思ったのですが、聞けば臨月とのこと。一番パニックになっていたのは私かもしれません。柏駅に着く頃には他の乗客が救急車を呼んでくれました。

あの時の私は本当に無我夢中で、駅員の方々にも「早く毛布ときれいな布を持ってきて！」とかなり上から目線で指示していたこと、反省しております。

ネット等では一部の心ない人たちからの批判もあり、落ちこんだ時もありました。そして私自身、後になって冷静に考えるととても怖い事をしたんだな、と…。母子ともに無事だったから良かったけど、一步間違えたら…。ただ、苦しんでいる人を私は放っておくことはできません。そしてきっとこの先もそれは変わりません。人命救助で表彰された方々皆さんそうだと思います。

日々、子育てに追われてきた私の人生の中で、出産という経験が人の役に立てたことを誇りに思います。

最後に今回の表彰式典で私に関わって下さった全ての方々にお礼を申し上げます。
本当にありがとうございました。



▲柏駅で列車を停止させて妊婦を救助



▲6号車停止位置



▲平成30年2月7日 茨城新聞 23面



▲平成30年2月7日 産経新聞 22面

田口 智恵



熊本県

2018年8月20日、田口さんは熊本港のフェリー乗り場の乗船券を販売するカウンターで勤務中だった。昼頃、同僚の男性から「港内に人が浮いている」という一報を受けたのは、島原から到着する船が入港する10分前だった。スタッフは着岸の準備を行うためそれぞれの持ち場に散らばっており、動ける人が少なかった。

田口さんが現場に駆け付けると、まさに船が着岸する所に人が浮いていた。その人の生存を確認し、浮輪を投げ入れるが上手く掴んでもらえず、同僚らと手分けして船を緊急停止させ沖に停泊させると、潮位を確認した。トライアスロン出場の経験が後押しとなり、携帯電話等をポケットから出し靴を脱ぐと、制服のまま階段を下りて飛び込み女性の元に泳いでいった。女性に近づいた田口さんは、これから救助を行うが、決して自分に触らないように告げ、仰向けにしてフェリーが着岸する際に車を降り降らせる可動橋までバックストロークで泳ぎ、自身は一旦階段まで戻ったが、階段が高く水上から届かなかったので、再度可動橋まで戻り引き上げてもらった。

現場は、施設の下が深くえぐれていて奥に流される可能性や、船のスクリューに巻き込まれたり、壁にびっしり張り付いている牡蠣等で怪味をしていたかもしれない一刻を争う救出だった。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

2018年8月下旬、何の変哲もない日常の勤務中、突然慌てた声で無線連絡が入る。

よほど焦っていたのか、今一つ要領を得ない内容に一瞬茫然とする中、私のいる窓口へ走り込んできて、現状を必死になって伝えようとする同僚。とにかく、海の中に人が浮いている？ いや、落ちてる？ これだけは呑み込めたので、取り急ぎ意のまま、裏口から現場の岸壁へと走る。暫し状況を見守るも、仰向けで流されながら、一度は掴んだ浮きを、なぜか手離してしまった要救助者。もはや力が尽きようとしているのか、また自分の意志で離してしまったのかは、私たちのいる所からは、判断できるはずもない。ただ、潮の流れなどを考えると、どっちにしてもあまり猶予がないことだけは周囲にいるみんなが理解していたので、私はやはり自分が行くしかないところで腹をくくり、気を引き締めた。

もちろん、この時ためらいがなかったと言えば嘘になる。大きく深呼吸をして、岸壁の際にあるはしごをつたい、海の中へ飛び込んだ。流れに沿うように泳ぎ、要救助者の元へたどりつき、すぐに生存を確認した。そこで一瞬安堵して力が抜けそうになったが、気合いを入れ直す。要救助者に「自分には絶対に触れないように、そのまま上だけを見てとにかく何もせず」と連呼し励ましながら襟元を引っ張り、フェリー可動橋まで泳ぐ。どうにか辿り着き、同僚らの助けを借りながら、水上から陸上へと押し上げる。そして、私も同僚らに引き上げてもらい、無事に生還。

後に、救急車到着までの間に、聞かされた真実。「なんでそのまま、死なせてくれ

なかったのか？」という相手からの耳を疑うようなまさかの一言に、私はかなりの衝撃を受けたが、それと同時に何とも言えない腹立たしさと、怒りが込み上げてきて、我慢の限界を超えてしまった。

「生きてくても、生きられない人が世の中にはたくさんいる！！」

「貴方にどんな事情があるかなんて、私は知らないけど、私は貴方を助けに行き貴方は助かった！」

「何かの縁があり、助かった命なんだから、その命を大切にしてほしい！」

「どんな形であれ生きていれば、絶対に生きてて良かったって思うことがあるから！」と、止めどなく言い放った。

なんとなく、モヤモヤした気持ちのまま、後は救急隊に任せて職務に戻ったが、後日、その相手のご主人様から、丁重に深々と「妻の命を助けて下さりありがとうございます」と御礼を述べられ、初めて助けたことを喜ぶことが出来た気がして、ようやく気持ちが晴れたのを覚えています。

そしてこの度、自分自身このような突然の出来事から、「社会貢献者表彰」いう身に余るような、すばらしい表彰を受け、想像すらしない、いろいろな経験が出来ましたこと、また様々な支援団体・活動の在り方などを目の当たりにして、今までの自分では知りえない数多くの事を学べる場に出席出来ましたことに、これまで関わっていただきました皆様へ、感謝の気持ちでいっぱいです。率直に申し上げれば、非常に嬉しく、大変誇りに思います。本当にありがとうございました。

最後になりますが、どこかで聞いたようなセリフですが、私が今まで生きてきた中で一番記憶に残る出来事になったことには、間違いありません。

かっこよくまとめるならば、あってはならない事ですが、もしもう一度、同じような場面に遭遇してしまったとしても、理由はどうあれ私はやはり人として、また飛び込んでしまうと思います。



▲田口さんの勤務先



▲女性が浮いていた付近



▲可動橋まで女性を救助して泳いだ

佐藤 定子郎



北海道

2018年8月14日の早朝6時頃、新聞配達を日課としている佐藤さんは、配達後に仮眠していると、「助けて！火事！」という叫び声と共に飛び起きた。隣の棟3階の部屋から火と煙が濛々と出ていた。佐藤さんと管理人は同時に駆けつけ、玄関から呼びかけるが、「煙で目が痛くて開けられない！」とパニックになった父親の声。そこへ、上の子どもだけが玄関ドアを開けて飛び出してきた。その子を管理人に託して避難させた。ドアを開けたことで玄関からも勢いよく煙が噴き出す。もう一人いるはずの子どもと父親に声で誘導するように何度も呼びかけていると、ようやく父親が子どもを引きずるようにして出てきた。二人とも目が見えずパニックになっており、佐藤さんは子どもの反対側の手を掴んで、二人をアパートの1階まで誘導し屋外へ救出した。

その後、逃げ遅れた人がいないか、再び棟内へ戻って確認を行った。その後、助けた子どものところへいくと、恐怖のあまり佐藤さんに抱き着いてきた。その勢いで子どもと一緒に後ろに倒れ込み、子どもをかばったために佐藤さんは左ひじを負傷。元航空自衛隊ということもあり、佐藤さんの冷静で的確な救出行動が親子を救い、逃げ遅れなどによる被害の拡大を防いだ。

(推薦者：美唄市消防本部)

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の表彰式典に御招待いただき誠にありがとうございました。

私が受賞させていただいた経緯といたしましては、その日は仕事の新聞配達を終えて仮眠をしていると外から「助けて！火事！」という声が聞こえたため外に出て確認すると隣の棟の3階の一室から火と煙が出ていることを確認しました。

管理人と共に現場に向かい、玄関から呼びかけてみると奥の方から「煙で目が痛くて開けられない」とパニックになった父親の声がしました。そこに上の子どもだけが玄関の扉を開けて飛び出してきたのでその子を管理人に任せて避難させました。その後、もう一人の子どもと父親に誘導するように声をかけると、なんとか父親が子どもを引きずるようにして出てきました。しかし2人とも煙で目が見えなくなっており混乱していたため、手を引いて屋外まで誘導し、再度、逃げ遅れがないか棟内に戻って確認を行いました。

その後、消防や救急が到着し、無事親子を救うことができたことと安堵する気持ちでいっぱいでした。

今回、式典に参加させていただき、受賞者の方々の話を聞きその活動の素晴らしさや苦勞を考えたときに自分の考え方を見直すきっかけになりました。

自分の人生や命を顧みず、他人のために社会貢献を行う方々に対して感動させられ、そのような方々と共に表彰させていただき、交流の場も設けてもらえることはこれほど名誉なことではないと感じました。



昨今は、地域や人の繋がりというものが薄れてきているように感じておりましたが、このような社会貢献を通した人と人の繋がりを認識させていただき、人の繋がりは何よりも大切なものであることを再度認識させていただきました。この思いを胸にこれからも自分にできる社会貢献をしていき、皆が豊かに暮らせる一助ができればと存じます。

末筆ではございますが、社会貢献支援財団の益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げてお礼の言葉とさせていただきます。この度は誠にありがとうございました。



▲火災現場となった家の玄関



▲煙で目が見えなくなった親子を階段まで救出



▲救助した子どもを座らせた

京都ファミリーハウス



代表
古賀 會委子

京都府

高度先端医療を求めて、京都市内には全国から多くの難病患者が集まってくる。京都ファミリーハウスは、そうした患者に付き添う家族へ、宿泊施設を1日1,500円という安価で提供し、患者家族を支援している。病院から近く、布団や炊事道具や冷蔵庫、洗濯機などの家電も据え付けられ、自分の家にいるような感覚でリラックスできるプライベートの部屋を用意し、時には患者が食べたい物をキッチンで作って持参することもでき、料理することで気晴らしにもなるという。患者を第一に考えて長期間慣れない土地で看病し続ける家族にとって、心身の疲労に加え、高額治療費、自身の宿泊費や交通費などの経済的負担が重くのしかかる。

現代表の古賀會委子さんをはじめ、スタッフのうち7名は自らも重病を患う子どもを看病し、苦勞した経験を持つ。この経験から施設の必要性を感知し、2005年3月にこの団体を発足して14年、現在14名のスタッフで3施設12部屋を管理運営し、患者家族への対応の仕方などの研修を行い、時には話を聞いてあげながら支え続けている。近年はボランティアスタッフ皆が毎月定期的集まって情報交換をしながらロゴ入り巾着などのグッズの製作販売もしているが、患者に好評であると同時にハウスの自立のための資金の足しにもなっている。

(推薦者：特定非営利活動法人京都難病連)

この度は公益財団法人社会貢献支援財団の名誉ある賞を頂き、心より感謝申し上げます。推薦をしていただいたNPO 法人京都難病連には御礼を申し上げます。

受賞式で、いろいろな活動をされている方々にお会い出来、交流を持てたのは人生の中で一番素敵な時間でした。交流の場で横の繋がりができたことも、これからの私たちにとって大きな財産となりました。

2001年1月に長男が白血病になり、私が1人で京都に滞在し長男に付き添いました。治療費プラス二重生活費と大変な3ヶ月でした。話を聞いてくれる人もいない、病院とマンションとの往復にこの先どうなるのか心配と孤独感でいっぱいになりました。その時にもし京都に宿泊施設があったなら、金銭的にも精神的にも私の気持ちに安らいだと思います。そんな思いの中、せめて家族が安心して京都で治療を受ける患者さんに付き添えるような『我が家』が病院の近くにあったらと、難病の子どもをもつ親たちが集まり2005年8月に京都ファミリーハウスをたち上げました。

初めは2部屋をオープン。その日に満室になりましたが、宿泊希望のご家族からの電話は毎日のかかってくる。部屋がないのでお断りする日々に、滞在施設を必要としている方々がたくさんおられることに心が痛みました。ご家族の希望どおりの宿泊が出来るようにと毎年少しずつ部屋を増やし、現在12部屋を管理・運営しています。

患者ご家族に寄り添うことだけを考えて、時には時間を忘れてご家族の話聞きま。その時間で少しでも気持ちが晴れたら。和らいたら。患者の前では泣けないけど

私たちの前では辛い気持ちを出し、気持ちを切り替えて病院に行って欲しい。乗り越えて欲しい…と願いながら一緒に過ごします。ただ部屋を貸すだけでなく、ご家族のひと時を共有できるファミリーハウスでありたいと思っています。これからも日々変わっていく治療や入院期間・外来治療に対応していけるよう、滞在施設もその時々に合わせて運営をしていきたいと思ひます。

いつの日か病気がない世界がくることを願って、その日まで私たちのできることを精一杯やっています。

最後になりましたが、「第53回社会貢献者表彰の副賞をスタッフのために使って下さい」とのお言葉をいただき、来年1月にスタッフ13人で初めてランチの時間を有ることに感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

京都ファミリーハウス
代表 古賀 會委子



▲お掃除ボラによる春と秋の大掃除



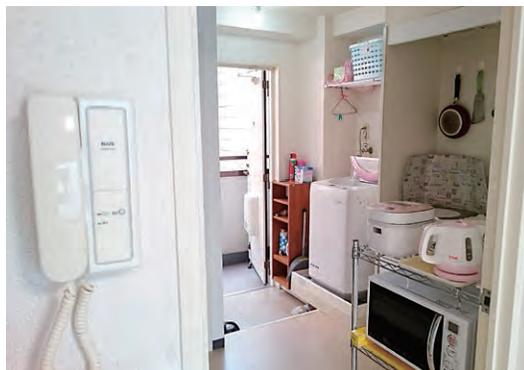
▲入居手続きの様子



▲手作りグッズの販売



▲春と秋のスタッフミーティング



▲滞在施設の部屋の中